

防災&地域コミュニティカフェ
「東日本大震災から10年ーその時、わたしは。そして未来への課題」
実績報告書

一般社団法人男女共同参画地域みらいねっと

1. 事業の目的と概要

大震災の教訓を風化させることなく、これからの未来に生かしていくことを目的として開催した。

パネリスト、スピーカーから震災時の経験やその後の活動について語っていただき、その上で、参加者全員90名がグループワークで自分自身の言葉で未来に向けた防災について語り合い、防災の大切さを学び合った。

2. 実施期日 令和3年3月7日(日) 13時30分~16時00分

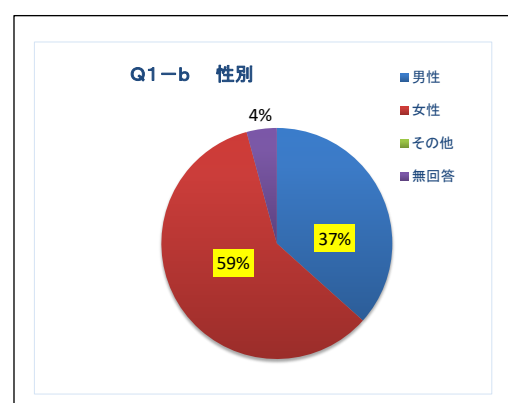
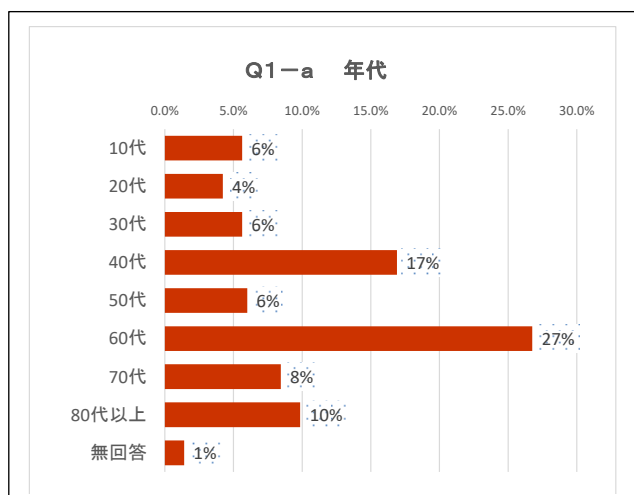
3. 実施場所 アピオあおもり イベントホール

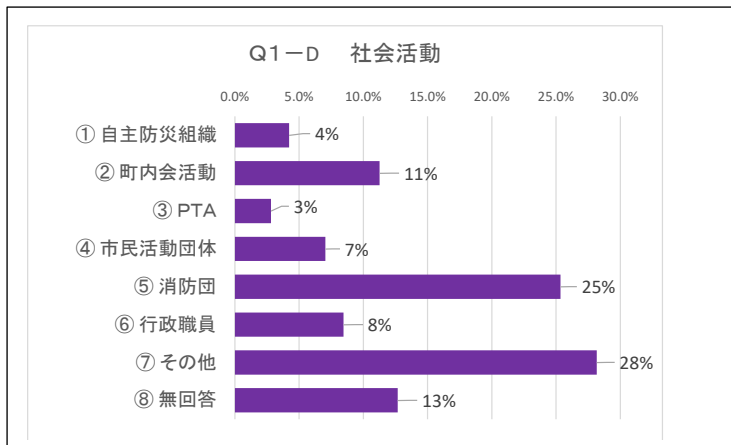
4. 実施状況

対象：防災活動者、関心のある方、どなたでも

参加人数：90名

年代、性別、属性ともに多様な人たちの参加があった。年代については、60代が27%、続いて40代が17%であった。他の防災イベントと比較すると、年代も多様であり、若い世代の参加も見られた。しかも、女性の参加割合が多かったことも防災に対する女性たちの関心が向上していると伺える。また、参加者の地域も青森市内のみならず、市外、県外からの参加もあった。





(1) パネルディスカッション

テーマ 「東日本大震災から10年ーその時、わたしは。そして未来への課題」

パネリスト 熊澤 健一 さん (青森市立東中学校 教頭)

新川 真由美さん (つながろう会 元代表)

佐々木 友喜さん (弘前大学人文社会科学部 2年)

コーディネーター 小山内世喜子

(一般社団法人男女共同参画地域みらいねっと 代表理事)



熊澤 健一 さん (青森市立東中学校 教頭)

震災時、沖館中学校に勤務しており、開設された避難所の運営に携わった。地域住民ら200人余りを受入れたが、防災資機材が十分でなく、寝床に体操マットを敷いたり、情報収集に技術の授業で作ったラジオなどを役立てた。マンパワーの重要性について身をもって知ったという。

新川 真由美さん (つながろう会 元代表)

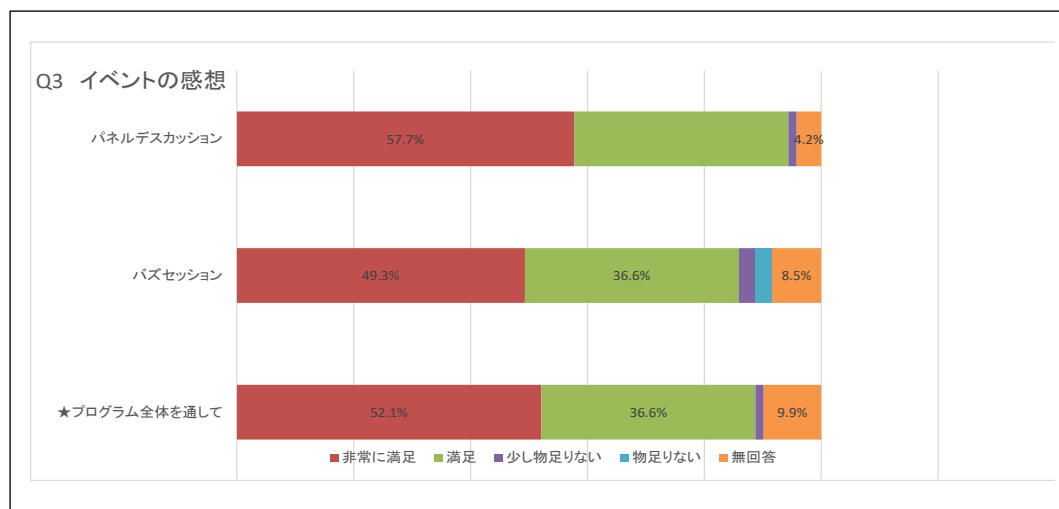
福島第1原発事故を受けて南相馬市から青森市に避難し、避難者の集い「つながろう会」を設立した。雪の多さに戸惑いながらも3年間暮らし、青森の人たちに心身ともに助けられた。親族の命を奪った津波や地震の恐ろしさを語り、「災害は人ごとではなく自分事と思って準備をして欲しい」と語った。

佐々木 友喜さん (弘前大学人文社会科学部 2年)

出身地の仙台市太白区で被災。当時小学4年生であった。高校2年生まで、

5. 防災&地域コミュニティカフェの成果

* アンケート結果より



下記、◇ は「アンケート自由記述」より

(1) 多様な人たちが防災に関わることの必要性

一部の防災スペシャリストの育成も必要だが、多様な取り組みをしている地域の人たち一人ひとりが防災に関心を持ち、「自分たちに何ができるか」を考え、行動していくことの大切さを気づくきっかけとなった。

- ◇ 様々な立場の方々が防災の取り組みを震災の経験をふまえておこなっていることを気づかされました。(40代/男性)
- ◇ いろんな活動をしている人がいっぱいいるんだと思った。災害について全く、自分は理解が足りませんでした。(40代/女性)
- ◇ 自分もこうしてはいられない。何かに役だとうと思いました。(60代/女性)
- ◇ 防災士と民生委員の2つの顔を生かして災害時の要支援者の役に立ちたいと思います。(60代/男性)

(2) 防災教育の重要性と継続

「中学生防災教育」の取り組みや新城小学校6年生の防災学習について紹介することで、若い頃からの防災教育が地域防災力の向上につながる事が伝わった。また、指定避難所である小中学校に関わる教職員の防災意識の向上と訓練の必要性を感じ取ってもらえた。

- ◇ 小・中学の教育プログラムを実践しているのは驚きです。(60代/男性)
- ◇ 10年前青森市は復旧が早かったのととても不便な思いをした記憶はありません。しかし、実際に沖館中学校で避難所運営をあたられた熊澤先生のお話を聞き、災害時に学校ができること、やるべきことを深く考えることができました。佐々木さんのお話の中で「小・中学生でも役割はある」「被災経験を

問わず発信できる」ことが印象に残りました。(40代/男性)

- ◇ 小学生の意識の高さに感激。(50代/男性)
- ◇ 小学生でも確実に理解できていることに驚いた。もっと幅広くいろんな世代に伝えることも大事。(40代/女性)
- ◇ 小学生の防災活動に自分もこうしてはいられないと強く思いました。(40代/女性)
- ◇ 新しい発見：教育の大切さをいまさらのように小・中・高校とすべての学校で少しずつですが防災について勉強していることを知って、うれしかったです。また、働き世代の人々にも広げていくことも大切だと思ったのが収穫の一つでした。(60代/女性)
- ◇ 若い自分たちにもできることはあるという事。(10代/女性)
- ◇ 改めて防災教育の重要性を感じました。自分のような若い世代の参加が増えるように活動します。(30代/男性)
- ◇ 防災意識を伝え続けることが大切ですね「命を守る行動を伝える」。(50代/女性)

(3) 伝えることの大切さ-「被災経験を問わず、誰でも発信していい」

大震災の教訓を風化させることなく、これからの未来に生かしていくことの重要性の理解につながった。しかも、被災経験を問わず、自分の言葉で発信し、多くの人たちに伝えていくことが大事であることを認識する機会となった。

- ◇ 一人ひとりの災害時の体験を聞いて、体験していなくても伝えることの大切さを知りました。(40代/男性)
- ◇ 当時の思い出、経験等の記憶が薄れてきたのが正直なところです。機会があって参加しましたが何かの区切りで振り返ることは大切だと感じました。(40代/男性)
- ◇ 忘れていくことが多い日々ですが、節目には思い出すことも大事だと思いました。女性の防災講習を月に1～2回でもいろんな場所で開催してほしいと思いました。(60代/女性)
- ◇ 実際に人の話を聞くことがテレビなどの報道よりも学べるが多かった。(20代/男性)

(4) 情報交換の場が必要

地域防災に関心を持ち、いざという時に自助、共助の力を発揮できる地域のつながりが必要である。そのためには、防災に対し、自分事として一人ひとりが捉えていくためには、平時からの交流の場・情報交換の場は大切であり、その必要性を感じ取ってもらえた。

- ◇ 震災・原発事故は決して忘れない。そのためにこうした交流の場、被災地の

お話を聞ける機会を作ってほしい。(60代/男性)

- ◇ 参加者の人が多く、いろいろな意見を聞くことができました。これからも20年、30年も続けてほしい。(40代/男性)
- ◇ 非常に勉強になりました。もっと時間をかけていろんな人と交流してみたいと思った。(20代/男性)
- ◇ 情報交換や、情報共有をする機会をもっと増やし、交流が「あたりまえ」の発想に変えてゆくことができないかなと思いました。(40代/女性)

6. 今後の取組み

社団として男女共同参画の視点を取入れた防災活動に取り組んで丸4年となる。今回のパネリストの皆さんもこれまでの活動の中でご一緒した方々であり、出会いの中で「その経験を多くの人に聞いてもらいたい、知ってもらいたい」という想いでお願いした。そして、そのパネリスト、スピーカーの方の話を聞きたいと、多くの方が参加して下さった。

当社団は地域の多様な人たちの出会いを通して、「知る・考える・行動する」という行動変容につながるための「場づくり」を今後も実施していきたい。

災害の復興に向けて、大規模な防潮堤や防災タワーが建設された。そのようなハード面も地域の人々に「安心」を与えるためには必要である。しかし、それ以上に大切なことは、命の大切さを知り、人々とつながり、一人ひとりがソフト面での復興に向けて進める力をもつことではないだろうか。それにはつどいの場が必要である。

そして、これからの地域を支える若い人たちの防災意識を高めることで、家族が、地域が防災に対し関心を持ち、地域防災力の向上につながっていく。そんな生きる力につながる防災教育を様々な団体と連携しながら続けていきたい。

今後もそのような場づくりとネットワークの構築に尽力していくことが、当社団の役割と考える。

「車座になってみんなで考えよう地域防災」

